

鶴見厚子 著

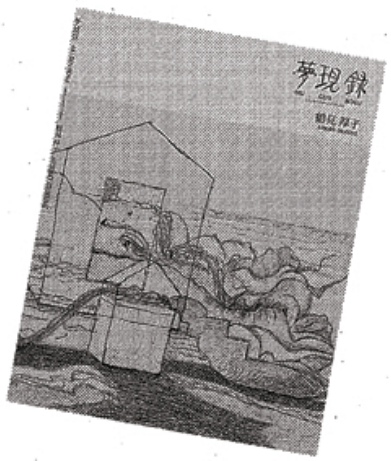
■ 画文集 夢現録

5・18刊 23・8cm×18・2cm 80頁 本体2500円  
プランニング アドゥ (tel045・712・2212)

# 実体を取り戻すために

作品は無論、絶妙で独特の文体も本書の魅力

## 宮田徹也



個人の美術画集。ちょっとは縁の遠い存在であったこと前までは高価で、豪華で、まるでロールス・ロイスやビートル大のような、一つの「ヌテイタス」の印象を受けた。実際、デザインや印刷に何百万円もかかったし、御墨を付けるための偉い美術批評家の原稿料も並ではなかったらう。勿論、そういった「権威付け」のためではなく、純粹に自己の作品を整理し世に問うために美術画集を発行していた個人は多数いるが、愛好家や専門以外の者達にとって

は縁の遠い存在であったこと前までは高価で、豪華で、まるでロールス・ロイスやビートル大のような、一つの「ヌテイタス」の印象を受けた。実際、デザインや印刷に何百万円もかかったし、御墨を付けるための偉い美術批評家の原稿料も並ではなかったらう。勿論、そういった「権威付け」のためではなく、純粹に自己の作品を整理し世に問うために美術画集を発行していた個人は多数いるが、愛好家や専門以外の者達にとって

誰も読まないの、WEBでも見かけない。芸術批評同様、消え失せてしまふ分野も沢山あるに違いない。それでも美術画集を出したアーティストは、出す。私はこの傾向に賛成だ。実体を取り戻し、自己のアピールよりも世界との共存を目指すことこそ、今日、必要にせられなくとも最も求められている行動だと私は信じる。誰でも出せるのはいいのだが、やはり最低限の体裁は必要だ。見やすいデザイン、お墨付きではなく客観的な批評、制作の意図、作品の分類、作品リスト、アーティスト略歴、参考文献、文字情報のバイリンガルなど。画集を編集し出版する作業は本当に苦勞だが、やり遂げたアーティストは一度割ける。

鶴見厚子は、そういったアーティストの一人だ。主に東京と神奈川で活躍しているが、2002年には長野での個展が予定されているし、ヨーロッパやアジアでの美術展にも参加している。51年東京生まれの鶴見は中学生の頃に横浜に引越し、75年に多摩美術大学を卒業。学校に勤務しながらも制作を続け、85年に神奈川県美術館の大賞、90年には鎌倉近代美術館賞を受賞し、高く評価される。2018年の生死をきき送る病から復活、3年前から暖めていたこの画文集を仕上げ、出版記念展覧会を横浜・キャラリスHIMIZUで行なった(5月11・24日)。緊急事態宣言解除寸前であったためにトクは中止したが、画廊は制限される業種ではなかったため、開催に支障はなかった。多くの人が感染拡大防止に努めて集い、美術が生きるために不可欠であることを確認した。

本書は、単なる美術画集ではなく「画文集」である。巻頭に美術批評家連盟会員の金澤毅、神奈川県民ホールギャラリーの学芸員であった藤嶋俊會、神奈川県立近代美術館館長の水沢勉という三者の批評が納められ、7つに章立てされた内容に、鶴見の作品の図版とそれを解説する鶴見の文章が収められている。鶴見の文章は堅苦しく専門的な批評ではなく、かといって心象風景を曖昧に書く詩でもない。作品は無論、この絶妙で独特の文体が本書の魅力となっている。

それと同時に、鶴見の制作の動機もまた、多くの人が魅了されることであろう。「もう、30年以上、夢日記を書き、睡眠時の夢をテーマに絵を描いて来た。夢は潜在意識の産物である。時には生きるヒントを警告してくれる。亡くなった人たちの再会も、夢の中で実現している。夢は5次元世界との通信パイプであるのかも知れない(題)。夢を主題にしているといっても結構具体的で、鶴見は筆が立つのだから、確固たる絵画が形成される。夢にまつわる鶴見の文章も夢が多く、鶴見はそれを未来だけでなく、別世界と繋がるテレパシーではないかと探る。

私も読まないの、WEBでも見かけない。芸術批評同様、消え失せてしまふ分野も沢山あるに違いない。それでも美術画集を出したアーティストは、出す。私はこの傾向に賛成だ。実体を取り戻し、自己のアピールよりも世界との共存を目指すことこそ、今日、必要にせられなくとも最も求められている行動だと私は信じる。誰でも出せるのはいいのだが、やはり最低限の体裁は必要だ。見やすいデザイン、お墨付きではなく客観的な批評、制作の意図、作品の分類、作品リスト、アーティスト略歴、参考文献、文字情報のバイリンガルなど。画集を編集し出版する作業は本当に苦勞だが、やり遂げたアーティストは一度割ける。

鶴見厚子は、そういったアーティストの一人だ。主に東京と神奈川で活躍しているが、2002年には長野での個展が予定されているし、ヨーロッパやアジアでの美術展にも参加している。51年東京生まれの鶴見は中学生の頃に横浜に引越し、75年に多摩美術大学を卒業。学校に勤務しながらも制作を続け、85年に神奈川県美術館の大賞、90年には鎌倉近代美術館賞を受賞し、高く評価される。2018年の生死をきき送る病から復活、3年前から暖めていたこの画文集を仕上げ、出版記念展覧会を横浜・キャラリスHIMIZUで行なった(5月11・24日)。緊急事態宣言解除寸前であったためにトクは中止したが、画廊は制限される業種ではなかったため、開催に支障はなかった。多くの人が感染拡大防止に努めて集い、美術が生きるために不可欠であることを確認した。

本書は、単なる美術画集ではなく「画文集」である。巻頭に美術批評家連盟会員の金澤毅、神奈川県民ホールギャラリーの学芸員であった藤嶋俊會、神奈川県立近代美術館館長の水沢勉という三者の批評が納められ、7つに章立てされた内容に、鶴見の作品の図版とそれを解説する鶴見の文章が収められている。鶴見の文章は堅苦しく専門的な批評ではなく、かといって心象風景を曖昧に書く詩でもない。作品は無論、この絶妙で独特の文体が本書の魅力となっている。

それと同時に、鶴見の制作の動機もまた、多くの人が魅了されることであろう。「もう、30年以上、夢日記を書き、睡眠時の夢をテーマに絵を描いて来た。夢は潜在意識の産物である。時には生きるヒントを警告してくれる。亡くなった人たちの再会も、夢の中で実現している。夢は5次元世界との通信パイプであるのかも知れない(題)。夢を主題にしているといっても結構具体的で、鶴見は筆が立つのだから、確固たる絵画が形成される。夢にまつわる鶴見の文章も夢が多く、鶴見はそれを未来だけでなく、別世界と繋がるテレパシーではないかと探る。

私はフロアスター教の研究著、岡田明憲の以下の一節が常に気になる。「あの世とこの世の境に、特別な神が祭られ、死者の霊の訪れを警告するために、騒々しい音がたてられる。このように、生者と死者、あの世とこの世を区別し、分離するために種々の工夫がなされた。それは、本来この両者が、お互いに無関係に存在するのではなく、それゆえ、放っておけば、混交する危険性があったからである(『死後の世界』講談社現代新書、1992年、51〜2頁)。

SHAKUJISHORIN  
詩歌句集古書専門  
tel 03(3995)7949  
★戦前の詩歌集雑誌高価買入  
★在庫力タログ発行  
石神井書林  
〒177-0041 東京都練馬区石神井町6-8-3

(嵯峨美術大学客員教授)